MAINICHI
毎日新聞
5月27日(金)
2016年(平成28年)
発行所：北九州市小倉北区紺屋町13-1
〒802-8651 電話(093)541-3131
毎日新聞西部本社
福岡市中央区天神1 毎日福岡会館〒810-8551
電話(092)781- 編集3100 事業3636 販売3221 広告3300
毎日新聞福岡本部

排温水活用でイチゴ栽培

日田・バイオマス発電所 隣接地にハウス完成

「林業と農業の懸け橋に」

創業者の願い実る

日田市天瀬町五馬市のグリーン発電大分（石田博社長）天瀬発電所の隣接地に、発電所から排出される温水を活用するイチゴ栽培ハウスが完成した。バイオマス発電は林業家による再造林や森林整備を活性化し、雇用ももたらしたが、同社を創業した森山政美前社長の「林業と農業の懸け橋になりたい」という願いが、木質バイオマス発電では初めてとみられる排温水ハウスに結実した。

【楢原義則】

イチゴ栽培ハウスで準備を進める長尾雅子さん（左）と勝己さん。左後方は発電所

2013年11月に稼働した同発電所は、半径50キロ圏から市場価値の乏しい林地の残材や間伐材、製材くずなどを集め、破砕して5センチほどにチップ化。乾燥してボイラー燃焼し、蒸気でタービンを回して5750キロワットを発電し、売電している。14年度には7万1400トンの未利用材が発電に使われた。

燃料代節約 11月から出荷へ

一方、森山前社長は発電所から出る温水に注目。トマト、イチゴなどの有機農業に取り組む天瀬町出口の長尾正臣さんに白羽の矢を立てていたが、長尾さんは昨年1月、病気のため65歳で急死した。

その遺志を継いだのが妻雅子さん(62)と長男勝己さん(38)だ。2人は温度が35度と低い排温水は「イチゴ栽培がベスト」と判断。4連棟の栽培ハウス（計1166平方メートル）と、育苗ハウス2棟（計312平方メートル）の完成にこぎつけた。事業費2500万円の半額は、県や市の補助金などで賄った。

ハウス内は作業しやすいよう、高さ約1メートルのベンチ16列が並び、「1日1円」と実質無償で提供された排温水が、培地に埋められたパイプを流れる。さらに、冬を中心に14～15度の温風を送り出し、ファン8基でかき回してハウス内を均等に温める。使用済み排温水は発電所に戻す。

雅子さんは「9月下旬に定植し、クリスマスや正月需要をにらんで11月中旬から来年6月に出荷したい。高騰する燃料代の節約効果は大きい」と話す。初年度の収穫目標は540キロ（540万円相当）で、今後増やしていく考えだ。